

**カミーノ**  
文学部4回 横田直美

カミーノとはスペイン語で道という意味である。辞書には道・街道・目標への道・行動の規範として進むべき道とある。そして、‘広く開かれた道’という意味を持つ。

カミノ・デ・サンティアゴ？何それ？  
確か、チリの首都がサンチャゴだよ。南米の話？  
え？違うの？ヨーロッパ？  
巡礼の道？歩く？何百kmも？

カミーノに立つ一年前まで、私はカミノ・デ・サンティアゴ（注1）について何も知らなかった。しかし、フランス側バスク地方の村サン・ジュアン・ピエン・ド・ポーに立ち、カミノ・デ・サンティアゴを踏破した。これを必然というのなら、どう説明すればよいのだろうか。

日本に住む私がカミノ・デ・サンティアゴの存在を知り、カミーノを歩こうと決意し、そして900km歩くというのが必然だったのだろうか？

パウロ・コエリョ氏（注2）はこう言う。

“すべての事に偶然はない”（注3）

このカミーノを歩き終えた今、カミノ・デ・サンティアゴと私との出会いは必然だと思うようになっていた。

### サンティアゴ巡礼について

カミノ・デ・サンティアゴとはヨーロッパで約1000年続くキリスト教の巡礼の道であり、キリスト教界では三大巡礼の一つに挙げられている。一つ目はエルサレムにあるキリストの墓に詣でる道である。巡礼者はパルミストと呼ばれ、椰子の枝をシンボルとした。ローマにある聖ペトロを詣でる道は二つ目の巡礼であり、巡礼者はワンダラーと呼ばれ十字架をそのシンボルとした。そして、三つ目がサンティアゴの遺骸（注4）を詣でるカミノ・デ・サンティアゴである。伝説によると、サンティアゴはスペインで数年間布教した後、エルサレムへ戻った。しかし、権力者ヘロデ王によって処刑されてしまう。当時、新興宗教であったキリスト教は厳しい弾圧を受けていたからだ。その亡骸は彼の弟子たちによって布教の地スペイン北西部のガリシアに運ばれ埋葬されたが、ヨーロッパの混乱の中でサンティアゴの墓の存在は約800年間忘れられてしまった。しかし、9世紀に星の導きによってサンティアゴの墓が発見され、遺骸を納める聖堂が建てられるとその場所はサンティアゴ・デ・コンポステラと呼ばれるようになった。この伝説に由来するものなのか、コンポステラとはラテン語で‘星の野’という意味である（注5）。そして、そのサンティアゴの遺骸を捧もうとヨーロッパ中からサンティアゴ・デ・コンポステラへ巡礼者が押し寄せた。これがサンティアゴ巡礼の始まりである。最盛期には年間50万人の人がカミノ・デ・サンティアゴを歩き、サンティアゴ・デ・コンポステラのカテドラル（注6）を目指したという。サンティアゴ巡礼者たちは聖地サンティアゴ・デ・コンポステラのあるガリシア地方特産のホタテ貝をその巡礼のシンボルとした。

カミノ・デ・サンティアゴはヨーロッパ中から無数の川のようにサンティアゴ・デ・コンポステラへと流れている。逆に、聖地であるサンティアゴ・デ・コンポステラからカミノ・デ・

サンティアゴを辿ってみると、道はローマ、ブダペスト、ベルリン、北欧などヨーロッパ中の都市へと続いている。すべての道はサンティアゴ・デ・コンポステラへ続くのである。

### 巡礼手帳を手にする

中世の時代はともかく、現代でもカミノ・デ・サンティアゴを歩いて巡礼する人は本当にいるのだろうか。2004年の巡礼者は約18万人（注7）であり、私にとって信じがたい数字であった。海外旅行も一般化し、今や宇宙旅行までも実現しようとしている現代において、車や電車ではなく自分の足で何百キロも歩き、聖地を目指すという行為は何を意味するのだろうか。私はキリスト教徒でもなく、巡礼に興味があったというわけでもない。1000年もの間、人を惹きつける道とはいったいどのようなものだろう。なぜ人はカミーノを歩くのか。何百キロも人を歩かせるカミーノとは何か？という疑問が、カミノ・デ・サンティアゴを歩いた動機であったようにおもう。無数にある巡礼路のうち最も一般的で、世界遺産に登録されているカミノフランセスを選び、フランス側バスク地方の村サン・ジュアン・ピエン・ド・ポーを出発点とすることにした。

巡礼者が持たなければならないクレデンシャルという巡礼手帳にはこう記されている。

「門は開け放たれている、何人にも。病人にも健康な人にも。カトリックだけでなく異教徒、異端者にも。貧者、愚者であろうとも。もっといえば、無宗教者であっても。」  
旅の準備に追われながらも、心のどこかで「この道を歩いてもよいのだろうか」と自問自答していた私にとって、この言葉は救いであった。

### カミーノのはじまり

巡礼者は、道標を頼りにして歩く。この道標はヨーロッパ中で見つけることができ、その多くが数百メートルあるいは数十メートル毎にある。黄色い矢印であったり、サンティアゴ巡礼のシンボルであるホタテ貝をモチーフにした道標であったり、様々な種類がある。寒暑風雪、筋肉痛、肉刺、疲労等に悩まされ、さらには空腹であっても、サンティアゴ・デ・コンポステラへと導く道標を目にすると巡礼者は励まされるものであり、私自身もそうであった。カミーノでは悪路もあり、悪天候の日もある。私の場合は、新調したトレッキングブーツが足になじまず、さらに肉刺にも悩まされ最初の一週間ほどはつらい思いをした。しかし、いつのまにかブーツは自分の足の一部のように感じるようになり、肉刺は聖ヤコブ巡礼者の勲章のように思えるようになった。

歩き始めて2週間ほど過ぎたころ、時計を外すという決断をした。カミノ・デ・サンティアゴを歩くときに、時計は必ずしも重要なものではない。歩く、寝る、食べるというシンプルで人間にとっては基本的な行動がサンティアゴ巡礼では求められる。あたりまえのこのように思うが、これだけをするということはなかなか難しい。現代人の日常には物事があふれすぎているからだ。サンティアゴ巡礼のリズムをつかむと、時計は必要ない。カミーノを歩くときに時を知ることは必要ないということを私は理解していた。しかし時計を外すことはできず、時を計るために時計を使っていた。何時間歩いたから何分休憩しよう、何時間歩いたから何kmくらい歩いたというように。しかし、疲れたら休憩すればよいことだし、どれくらい歩いたかなんてどうでもよいことだと気がついた。カミノ・デ・サンティアゴを歩く間は時間に縛られることなく、しっかりと自分に向き合いたいと思った。時計を外してみると、今まで自分がどれだけ時間というものに縛られていたかということに気がつく。時間とは自分次第で長くも短くもすることができるものである。私がカミノ・デ・サンティアゴを歩いたのは40日間だが、その一日一日はなんと短いものであったのだろう。

## ホスピタリティー

カミノ・デ・サンティアゴを歩いていると様々な出会いがある。それは、人や自然、普段は気にも留めない小さなこと、そして自分自身である。その一つ一つが素晴らしいものであるが、その中で印象的な出会いを一つ紹介したい。

どこまでもただ一本続くカミーノを一人で歩いていたときのことである。カミーノ沿いにある家から中年の女性が出てきた。私より 10 メートルくらい先を歩きはじめた。彼女は後ろから一人で歩いてくる東洋人の私を気にしているのか、たまに振り返ってくる。とうとう

「ピルグリナ！！」(注 8)

と声をかけてきた。その日はカミノ・デ・サンティアゴを歩く最後の日であった。それまでの 900 km の道のりや出会った仲間、出来事などを思い出しながら一人で歩いているという一日であった。最終の地まであと 5 km くらいかというときに声をかけられたのである。

「どこから来たの？」という女性に、日本からきたと答える。

「日本？そんな遠くの国から？日本人をみるのは初めてよ。女の子がたった一人で！！」

きっと彼女にとって日本とはふだん想像することもない遠い場所なのであろう。話を聞くと、近くに住む友人の家へ行くところだという。遠い異国からの巡礼者が珍しいということもあって人が集まってきた。

「あなたはいったい何を犯したの？日本から一人でやってきて、こんな地の果てまで歩くなんで！フランスから 900 km も一人で歩いたのなら、きっと神様は許して下さるわ。でも、いったい何をしたの？人を殺したの？いいえ、日本から来るぐらいなもの。もっと悪いことをしたのでしょうか？」

答える暇もないくらい質問をあびせられる。

確かに、カミノ・デ・サンティアゴは厳しい道である。しかし、人を殺したことさえ許される道なのだろうか。中世の人たちにとって巡礼とは、自らに課した現世の苦行であった。聖遺物を拝み、自己の罪を悔い改め、神に救いを求め、許しをこい、そしてやがて訪れる最後の審判のときに天国へ導いてもらうためのいわゆる贖罪の道であった。実際に、中世の時代は罪人もこの道を歩いていたようである。そのため、彼女たちは私が許しをこうために歩いているのだと勘違いしたのだ。私がカミノ・デ・サンティアゴを歩くようになった経緯を説明すると、

「巡礼路沿いに住んでいるからよく巡礼者をみかけるけど、カミノ・デ・サンティアゴを歩くために世界中からたくさんの人たちがやってきているみたいね。だから巡礼者の話す言葉、宗教、人種、そしてその文化も様々よ。だけど巡礼者はお互いを尊重し、争うことなく、助け合って歩いているわ。世界中で争い事がおきているけど、このサンティアゴ巡礼の精神が世界中に広がれば世界は平和になるとおもわない？だからあなたみたに遠くからやってきた巡礼者に会うと、世界に平和が広がった気がするのよ。世界中にもっとこのサンティアゴ巡礼のことを知ってもらいたいわ」

通りすがりの私に果物を分けてくれたり、冷たい水を飲ませてくれたり、本当に心温かい人たちであった。彼女たちに限らず、カミーノ沿いに住む人たちは巡礼者を温かく迎えてくれる。

さらに、最初に声をかけてくれた女性は

「今日は私の家に泊まっていきなさい、そして週末のお祭りに一緒にいこう。」

とまで言ってくれた。彼らの温かいホスピタリティーに感謝しながら、

「またね。」

という言葉で別れた。出会いから別れまで一時間ほどである。別れというものは悲しいが「またね。」という言葉がいつか現実になればとそのいつかの再開を信じれば、心楽しいものになる。

## サンティアゴ巡礼の新しいスタイル

現代のサンティアゴ巡礼はその中世のものとは少し変化したように感じる。ストイックに歩くことだけが現代のサンティアゴ巡礼の美德とされるものではない。スペインの景色や食べ物、人とのふれあいを大切に、スペインの建築を楽しみながらカミノ・デ・サンティアゴを歩く人も大勢いる。そのため、自分に最も適した手段でサンティアゴ・デ・コンポステラを目指す場合もある。つまり、車や電車を使ってサンティアゴ巡礼をおこなうということである。巡礼と観光とが混ざり合った新しいスタイルが確立している。

カミノ・デ・サンティアゴを辿る者には、必ず何かの奇跡が起きると現代でも信じられている。科学技術がいくら発達しても、サンティアゴの奇跡を完全には否定することのできない人間は、たぶん起こらないであろう奇跡と救いを心のどこかで信じて、カミノ・デ・サンティアゴを辿る。カミーノを歩く前、私はその奇跡を信じてはいなかった。しかし、確かに奇跡は起きた。サンティアゴ巡礼のルールの一つにこのようなものがある。

「巡礼者は、善意の援助、木々の間に吹く風、村の人たちの挨拶、遠くに見える山など、自分が受けるすべてのことに対して感謝する。そして、観光客はあたりまえのようにそれらを強要するのだ。」

カミノ・デ・サンティアゴを歩いたことによって、今まであたりまえだと感じていたことは、実はそうではないということに気づいた。自分のおごりであった。そもそも、登山などの経験もなく、一日に20km以上歩いたこともなく、初めてトレッキングブーツをはいたような私が約12kgのバックパックを背負い、真夏のスペインで900km踏破したということが奇跡なのである。つらいときに私を励ましてくれた人たちとの出会いも恵まれた奇跡だ。その奇跡に気づくことができるようになったことが私の身におきた奇跡なのだ。幸せを‘築く’ということも大事であるが、今ある幸せに‘気づく’ということの大切さを知った。肩の力を抜いてシンプルに生きることができるようになったとおもう。

## サンティアゴ巡礼の道の終わりにあるもの

もちろん、サンティアゴ巡礼の終着の地はサンティアゴ・デ・コンポステラである。サンティアゴ・デ・コンポステラに到着すると、巡礼事務所で巡証明書を受け取る。しかし、それは目で見ることのできる結果の一つにしかすぎない。大事なのはサンティアゴ巡礼の過程であり、そこで得たものをその後の人生でどう生かしていくかである。しかし、私はサンティアゴ・デ・コンポステラに到着しても、サンティアゴ巡礼の答えを見つけることができずに途方にくれていた。巡礼者のミサをうけても、カミノ・デ・サンティアゴを歩き終えたという実感はなかった。私はまだサンティアゴ巡礼を終わらせるわけにはいかなかった。

サンティアゴ・デ・コンポステラから西へ90kmの所にフィステーラという小さな港町がある。スペイン語でこの町は‘地球の終わり’という意味である。ヨーロッパ世界だけしか存在しないと考えられていた時代、大陸の西の端は地球の終わり、地の果てだった。その町の岬、フィステーラ岬を巡礼の終着とすることにした。岬という字は‘山の甲’と書く。つまり山の頂上である。日本の山岳崇拜と同じように、カボ・フィステーラは神聖な場所とされている。日本人の感覚と通じることもあるのだなど不思議に思いながら岬へのなだらかな坂を上る。この岬で巡礼中に使った衣服や杖を燃やすことによって巡礼者は一度死に、それと同時に許された者としての再生をされると言われている。サン・ジュアン・ピエン・ド・ポーから900km歩いた私にとって、ここが本当にカミーノの終わりだと感じた。もうカミーノはない。目の前にあるのはどこまでも続く大西洋だ。巡礼者を導くホタテ貝をモチーフにした矢印はフィステーラが近づくにつれて地面を指すようになっていた。本来ならば巡礼者の進むべき方向を指しているはずなのに。この地面を指す道標を目にするたびに、サンティアゴ・デ・コンポステラ到

着のときとは違う本当のカミーノの終わりを感じていた。やはり、何百キロも歩いた巡礼者にとってフィステーラ岬は世界の終わり、地の果て、そして本当のカミーノの終わりであった。900 kmの間、巡礼者を導き続けた黄色い矢印はもうない。そこにあるのは見渡す限りどこまでも続く海だけである。再生を果たした巡礼者たちは、この地からカミノ・デ・サンティアゴではない己の道をスタートさせるのだろう。ここからは自分自身で人生の道標を描かなければならない。カミノ・デ・サンティアゴを歩いているときに聞いたこの言葉をかみしめながら、巡礼者は己の巡礼をスタートさせる。

**Quando termina el camino de santiago,  
empieza tu auténtico camino.**

カミノ・デ・サンティアゴを終えたとき、  
あなたの本当の道が始まる。

<注>

(注1) サンティアゴとはキリスト教の十二使徒の一人である聖ヤコブのスペイン名であり、カミノ・デ・サンティアゴとは聖ヤコブの道という意味である。

(注2) ブラジルの作家。サンティアゴ巡礼を題材とした「星の巡礼」は世界的ベストセラーとなった。

(注3) パウロ・コエーリョ (1998) 292 頁。

(注4) 本来では遺体の意であるが、キリスト教会では身につけていたものや身のまわりにあったものも含む。サンティアゴ巡礼では聖ヤコブの遺体である。

(注5) 一九世紀以降の考古学的調査の結果、現在のサンティアゴ大聖堂の地下にローマ時代の霊廟と思われる石室が発見され、この地が墓地(ラテン語で *compostela*)であったことから、現在の呼び名になったという説もある。

(注6) キリスト教の大聖堂。

(注7) サンティアゴ巡礼事務所の統計より。この数字はサンティアゴ巡礼事務所が発行する巡礼証明書の発行枚数と一致する。よって、巡礼証明書を必要としない巡礼者および車や電車、バス等でサンティアゴ・デ・コンポステラを訪れた巡礼者は本稿での巡礼者数に含まない。

(注8) スペイン語で(女性)巡礼者の意。

写真1 カミノ・デ・サンティアゴとホタテ貝をモチーフにした進行方向を指す道標



<参考文献・ホームページ>

池田宗弘（1990）『巡礼の道絵巻ロマネスク彫刻紀行 EL CAMINO DE SANTIAGO EN ESPAÑA』形文社

John Brierley *A Pilgrim's Guide to the Camino Fisterra* (2003) Findhorn Press

John Brierley *A Pilgrim's Guide to the Camino Francés* (2003) Findhorn Press

Paulo Coelho 山川紘矢・山川亜矢子訳（1998）『星の巡礼』角川文庫

OFICINA DE ACOGIDE DE PEREGRINOS (2005)

「ARZOBISPADO DE SANTIAGO DE COMPOSTELA」

<http://www.archicompostela.org/Peregrinos/>